

教育分野特別専門委員の発言要旨

白石 敏行 山口大学教育学部教授（幼児教育・保育）

- ・ 学びの土台を作るのが幼児教育・保育であり、幼児期に探究心を培うことが重要である。
- ・ 幼児教育・保育においては、子どもの発達段階に応じた環境を構成することが重要である。
- ・ 子どもの自信や挑戦する力を育むためには、保護者や幼稚園教諭・保育士が、他の子どもとの比較ではなく、その子の長所や成長に目を向け、些細な事でも認めて褒めることが重要である。
この重要性について保護者を啓蒙することが必要である。
- ・ 認定こども園の増加等を受けて、幼稚園教諭免許状と保育士資格両方の取得が求められている。
- ・ 幼稚園教諭二種免許状の上進が推進されており、本県でも昨年度から幼稚園教諭免許法認定講習が開講されている。私立幼稚園を中心に、全県から受講生が参加している。
- ・ 幼稚園教諭・保育士が、研修や講習で学んだことを自分に置き換えて実践に活かし、その結果、子どもの行動がどのように変わってきたかを振り返ることで、資質の向上につながる。
- ・ 幼稚園教諭・保育士を目指す学生の育成に向けては、理論と実践の両方が必要。学生の時から、幼稚園・保育所等現場に入って、子どもたちと関わりながら、学んだことを試して、それを振り返る理論と実践の往還が重要である。
- ・ 園内研修は、若手の幼稚園教諭・保育士が、自分らしい保育を作っていく場にするべきである。経験豊富な職員が若手職員の良さを認め、若手職員が、自信をもって、自分らしい保育を実践できることが、やる気を高め、職場定着につながる。
- ・ 保護者や幼稚園教諭・保育士の悩みに対して、専門的な立場で相談できる養護教諭やスクールカウンセラーのような職員が必要である。各園への配置が困難であれば、地域ごとに配置することも有効である。
- ・ 子育てに悩む保護者が情報交換できる場があるとよい。幼稚園等においては保護者の保育参加を実施しているところもあるが、その際、自分の子どもだけでなく、他の子どもと関わることで、改めて自分の子どもの良さや個性が見えてくる。
- ・ 自然環境を活かした原体験は重要である。体験活動には、保護者を巻き込むことが重要である。

中でも、農業体験は、保護者に対する食育にもつながり、結果として子どもの食の充実につながる。保護者に食を通して、子どもにどういう風に育ててほしいかを考えてもらうことが重要である。

松岡 勝彦 山口大学教育学部教授（特別支援教育）

- ・ 若者が減っている中、一人ひとりの意味が、今までの一人ひとりと違ってきている。
良いところを見つけて伸ばすとともに、わかりやすく具体的に教えて、達成したら労い褒める、という人材育成方法が今後は重要である。

【特別支援教育】

- ・ 特別な配慮が必要な子どもを持つ保護者が孤立する傾向にある。子どもたちを保護者任せ、家族任せではなく、社会としてバックアップする仕組みが必要である。子育て経験のある方が子育てのアドバイスをする取組をもっと充実するとよい。
- ・ いつでも気楽に相談できるオンラインでの子育て相談システムがあるとよい。
- ・ 発達障害の子どもは、臨機応変ということは苦手だが、プログラミングなど手順が決まっているものは受け入れやすく、集中力や観察眼、芸術的センス、視覚認知能力など特定分野で、健常者とは全く異なる能力を持つ子どももいる。
こうした才能があるのに、苦手なところにスポットライトが当てられて、友達付き合いや学校が嫌になって、不登校や引きこもりになってしまうケースもある。
発達障害の子どもの苦手なところではなく、得意なところにスポットライトを当てて、伸ばし、その力を世の中に活かす試みがあるとよい。
東京大学先端科学技術研究センターの異才発掘プロジェクト「ROCKET」では世界最先端の研究を行っており、参考になる。
- ・ カウンセリングマインドを持った養護教諭やスクールカウンセラーが保護者の相談窓口になるとよい。

【幼児教育・保育】

- ・ 人づくりの基本は自己肯定感である。幼い時期に自己肯定感を育むことが極めて重要である。
- ・ 発達障害のある子どもも含め、幼児が幼稚園や保育所から帰宅するときに、「今日はいい時間を過ごせたな」「また来たいな」と思わせることが重要である。
そうした毎日の積み重ねが、チャレンジ精神や、失敗しても立ち直る力を育む。
- ・ 幼稚園教諭は、子どもの自発的な行動を促し、子どもや保護者との信頼関係を損なわないような声かけが上手である。こうした指導方法は、小学校以上の教員にも参考にしてほしい。
- ・ 質の高い幼児教育・保育とは、子どもが自発的に行動するように、分かりやすい指示をして、子どものやる気スイッチをオンにし、行動に対して労いや褒め言葉が出てくるような支援だと考えている。
- ・ 幼稚園教諭・保育士等も、「今日働いてよかったな」と感じるようになると、若手職員の離職問題の解決にも資する。
そのためには、管理職や経験豊富な職員が、若手職員に具体的に何が良かったのかを、できるだけ早く褒め、労いの言葉をかけることが重要であり、そうした研修を充実すべきである。

- 若手が仕事を辞めずに仕事を続けていけるような仕掛けがあるとよい。
他園職員との交流ができ、なおかつ知事から激励を受ける機会があれば、孤立感の解消や、ストレスへの対処法を学ぶことができるし、モチベーションが高まり、働き甲斐になる。

香川 敬 山口県私立幼稚園協会理事長

- ・ ペリー就学前プロジェクトでも明らかのように、質の高い幼児教育は、非認知能力の育成等に大きな影響を与える。

人間としての非認知能力を十分に育む幼児教育・保育の重要性に鑑み、人としての育ちの連続性と発達順を踏まえた人づくりを推進することが重要である。

- ・ 幼稚園は、子どもたちが初めて出会う学校であり、幼児教育は、自らの悲しみや喜びを味わいながらやり抜く力、生き抜く力を育み、人として育つ、その土台となるものであり、小学校に上がった時に、より能動的に学習するための「アクティブ・ラーニング」へのしっかりとした基礎を培うことを主な目的としている。
- ・ 幼児教育は、その地方の環境が育てるものであり、山口県の環境や文化で子どもたちを育むことが重要である。
- ・ 環境を通して行う幼稚園・保育所と系統学習を重視した学校との教育の在り方は異なっている。

幼稚園では、「大好きな友達ととことん遊びこむ」ことを重要視している。特定の大好きな友達と遊ぶことで「友達って本当にいいな」と思える原体験を経験することが重要である。

一方、小学校では、特定の友達ではなく「誰とでも」仲良く遊ぶことが求められるのではないかと受け止めている。

そうした相違点を踏まえながら、幼保小接続の在り方を希求し、これを重視した連携策を構築することが重要である。

そのためには、幼児教育長期研修等のさらなる人事交流の促進が求められる。

小学校教員が幼稚園に派遣されると、園児のコミュニケーション能力の高さに驚かれるようである。小学校教育では、このコミュニケーション能力の芽を摘むことなく、さらに伸ばして行ってほしい。

- ・ 「調査・分析→計画→実行→反省→記録・保管」のサイクルを繰り返しながら、恒久的に幼児教育・保育の振興に努めていくことが重要である。
- ・ 支援が必要な子どもが増加していることから、福祉、医療、特別支援教育等の専門機関との連携を深めるとともに、保護者の教育力を高めることが必要である。

また、幼児教育に、インクルージョン、ノーマライゼーションという観点を取り入れることを重要視したい。

- ・ 幼稚園教諭や保育士のさらなる質の向上を目指すため、多様な研修をより多く実施することが必要である。
- ・ 幼稚園・保育所における自己点検・自己評価については法的に義務付けられているが、関係者評価は努力義務になっている。保護者に詳細なアンケートを実施し、それを生かすなどの関係者評価を深めるとともに、幼児教育の専門家をアドバイザーに入れるなどして、教育内容の底上げに資する第三者評価を取り入れることも視野に入れて取り組みたい。
- ・ 日本は「子どもの権利条約」を批准しているが、睡眠時間の短さ、テレビ視聴時間の長

さ、家庭における子どもとの関わり方などが課題になっている。

子どもが納得いくまで絵本を読んであげる、子どもの思いをしっかりと受け止めるなどに配慮し、子どもが「今日も楽しかった、嬉しかった、また明日」と感じられるように、子どもの最善の利益を追求すべきである。

- 幼稚園・保育所を対象とした「山口県幼児教育センター」を設置し、教育的な見地から幼児教育・保育の重要性を発信していくことが非常に重要である。
- 山口県における幼児教育を推進していく上で、山口県立大学に幼児教育学科を設置することを是非お願いしたい。
- 全日本私立幼稚園連合会では「こどもがまんなかプロジェクト」として、子どもが撮影した写真のコンテストやコンサート、各種体験イベント等を実施している。

山口県においても、県の素晴らしい環境を活用して、県独自の子どもの環境改善キャンペーンを打ち出すことができれば素晴らしいことだと思う。

出井 真治 山口県保育協会会長

- ・ 生まれてきてよかった、愛されている、自分はとても大切な存在なんだと自分の中で感じることが、社会に役立つ人間になりたいと思うことにつながる。そのためには、まず、愛されること、愛されたという経験が必要である。
- ・ 自己肯定感を育むためには遊びが最も効果的である。興味を持ったことを体験できる遊びをたくさん準備することが、保育の充実につながっていく。
- ・ 遊びの中で、充実感や達成感を育みながら、地域の小学校でかわいがってもらえる、良いところを伸ばしてもらえようような、社会性のある子どもを育てることが重要である。
- ・ 子どもたちが将来にわたって、山口県を好きであり続けるためには、この町のために、何かしたいというきっかけを持つことが必要である。
- ・ 子どもたちが祖父母と深く関わったり、身近な人の死に向き合ったりすることなどを通じて、命の尊さを知り、感謝の気持ちや感受性、社会規範を身に付けていく。
- ・ 子どもと保育士との愛着を育むためには、保育士が子どもと共に楽しみながら、一緒に遊ぶ、行動する、悩む、考えることが非常に重要である。
- ・ 保育所では、30人の子どもがいたら30種類の対応をしているが、小学校ではそうした対応は難しい。
そうした中で、教育機関と幼児教育・保育機関が、共に学び合うという対等の立場で連携していくことが重要である。
- ・ 県立大学の幼児教育学科が廃止され、現在県内には、保育士を養成する教育機関が少ない。山口県が責任を持って、幼児教育・保育のリーダーとなる、専門的な人材を育成する必要がある。
- ・ 発達障害の子どもの数が増加している。保育士の能力が高ければ高いほど発達障害の子どもに対応ができる。そのためにも保育士には、しっかりとした障害児教育を行うことが必要である。
- ・ 幼児教育・保育に関する調査研究や幼稚園教諭・保育士の研修、効果的な幼児教育施策の企画・立案等を担うセンター的機能が必要である。
- ・ 子どもが言うことを聞かない、思いどおりにならないと、保護者が子どもの次の行動を待てずに、児童虐待につながるケースもある。保護者を育てることも必要である。

牛見 正彦 山口県私立中学高等学校協会副会長

- ・ 長いスパンで人づくりに取り組むべきである。
- ・ 山口県には明治維新をやり遂げた先人がいる。これは他県にはない特色である。
先人に倣って、発奮するように若者を育成する必要がある。
- ・ 山口県人として、山口県に対して誇りを持つ、先人の志や行動力を学び、自信をもって、自分たちも大いに頑張ろうという気持ちを育むことは必要である。
私立学校においても、ふるさと教育に取り組むことは重要である。
小学校・中学校・高等学校のいずれにも合う教材や授業で使えるような映像資料を県で作成して、私立学校に無料で貸し出す方法もあるのではないか。
- ・ 山口県が育てた若者が山口県に残って活躍するためには、ふるさとに対する愛着や誇りを持たせる教育がさらに必要である。
- ・ 新型コロナウイルス感染症の拡大により、教育の ICT 化が加速している。教科書にも QR コードがついており、より詳しい資料を見ることができるようになっている。タブレット PC は文房具として有効であり、結果としてオンライン授業が可能になる。
ICT 機器は、対面授業の中で、課題解決能力を養うためのツールとして活用することが基本である。生徒の発表での活用も積極的に進めていかなければならない。
- ・ オンライン授業は、不登校の生徒への対応や、自分で学習を進める習慣づけに有効である。
- ・ 教育 ICT 化の推進に向けては、通信容量の課題がある。
SINET 等の活用や 5 G 通信網の整備などにより、私立学校も高速大容量の通信が可能になると、教育 ICT 化が一層推進できる。
- ・ 公立学校と私立学校が一緒になって、県の課題に対して取り組んでいく姿勢が重要である。
- ・ 進学を目的とした子どもたちの県外流出は大きな課題。中学校進学時に他県の中高一貫校に進学する子どもが一番多い。
- ・ 公立・私立学校ともに、地域振興と学力振興の両面に取り組むような、県民に魅力ある学校を作る必要がある。
- ・ 私立学校は特色ある教育活動を進め、学校のイメージを上げる必要がある。

安村 裕美 山口県児童入所連絡協議会副会長

- ・ 郷土に対する愛着は非常に重要である。

社会的養護の課題を考える中で、ふるさとの先人たちの取組や熱い思いがヒントになることがある。昔の人たちがこんなに一所懸命にやっていた、すごいと感じる、だから自分も頑張ろう、と親近感がわく。ふるさとのことについてもっと触れる機会があるとよい。
- ・ 児童養護施設に隣接している認定こども園では、毎年、子どもたちが絵本を見て、自分たちでテーマを決めて、積み木で表現する取組を行っている。錦帯橋を作った年があった。

作る前には、実際に本物の錦帯橋を見に行く。そして保育所で図面を書き、子どもたちが話し合いながら、パーツに分かれて、年長児が役割分担して、協力しながら作っていく。そうした一連の体験を通じて、想像力や創造力、協調性、集中力を育くんでいることを、子ども達の活動を見て、実感している。

ものを作っている時の子どもの姿はとても生き生きとしていて、力強さを感じる。これは人間の本来の姿（本質）ではないかと思う。
- ・ ICTなど新しいものを取り入れることも必要だが、友達と作業する場合はICTではできない。両者のいいところをバランスよく取り入れながら、子どもたちが、自分からやりたいと思うことを体験させる場が重要である。
- ・ 子どもは、幼い頃から注目されて、しっかりと褒められ、「すごいね」と共感され、大人と一緒に笑って踊ってくれて、自分を認めてもらえることが非常に重要である。
- ・ ありのままの自分を大切な存在だと思う自己肯定感が育つには、乳幼児と養育者との関わりが大切である。養育者の優しい表情や声、匂いなどの情報が乳幼児の頭の中に記憶され、「いつもの養育者が、心地よい気持ちにさせてくれる人」と、インプットされる。こうした養育者とのやりとりの繰り返しが、自己肯定感を育み、養育者との愛着関係を作り、人としての土台になっていく。そして、信頼している大好きな人から、童謡や絵本を読んでもらうことで、言葉の貯金を増やしていく。また、感受性や想像性が育まれ、それが、成長するにつれて、友達や大人とのコミュニケーション能力に育っていく。

そのためには、家庭での保護者の関わり方が最も重要であり、家庭で、子どもを愛情深く育てることができるように、家庭、保護者を支援することが必要である。養育者が余裕をもって養育することができ、困ったことがあったら相談できるような体制が必要である。
- ・ 社会的養護においては、特定の職員が子どもに関わり、より家庭的な環境の中で養育することができるよう、施設の小規模化や里親委託の推進が重要である。

児童養護施設は、退所した子どもにとって一生居場所となる実家のような機能が求められているが、資金や職員不足から十分なアフターケアができない課題がある。できるだけ長期にわたる継続的・連続的な支援が行える体制の整備が必要だと感じている。